

「令和4年度富山市中学校3年生学力調査」
結果の概要

令和5年1月27日(金)

富山市教育委員会

「令和4年度富山市中学校3年生学力調査」結果の概要について

I 本調査の目的

- ・各中学校が、3学年生徒の2学期終了時の学力定着状況について、実証データに基づいて把握し、今後の学習指導の改善・充実に生かす。
- ・生徒一人一人が、自分の努力すべき課題に向かって意欲的に学習に取り組むよう進路指導資料として活用する。

II 実施状況

- 1 実施期日 令和4年12月1日(木)、2日(金)
- 2 調査教科 国語、社会、数学、理科、英語
- 3 実施学校数・生徒数

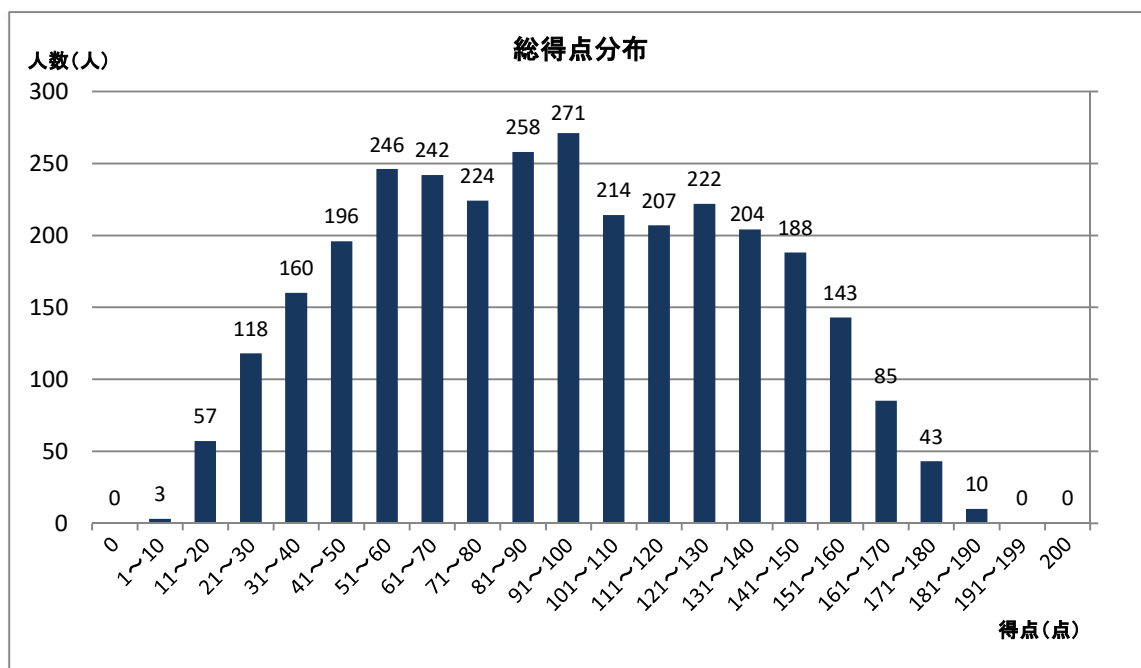
実施学校数	生徒数	
26校1分校 附属中を含む	在籍数	3,514人
	受検者数	3,091人 (5教科全てを受検した生徒数)

III 結果の概況

- 1 教科別全生徒平均点

国語	社会	数学	理科	英語	総得点
18.9点	20.4点	15.7点	18.4点	19.2点	93.2点

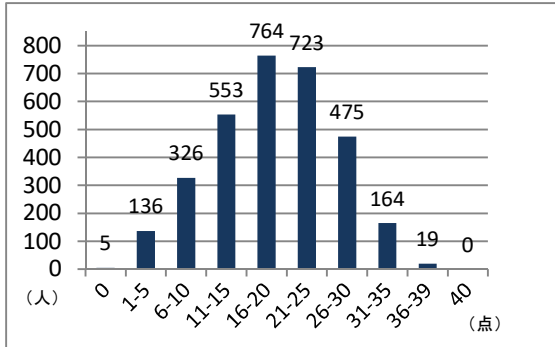
- 2 総得点分布グラフ



3 教科別得点分布グラフ

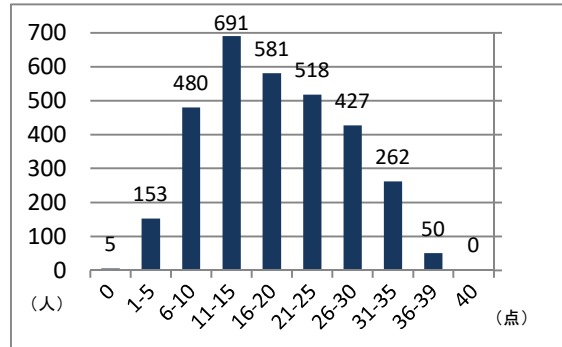
国語

平均点 18.9点 受検者数 3,165人



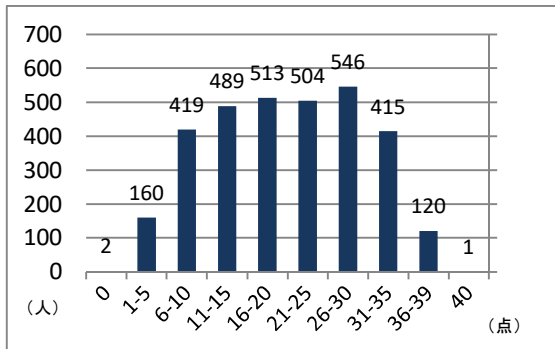
理科

平均点 18.4点 受検者数 3,168人



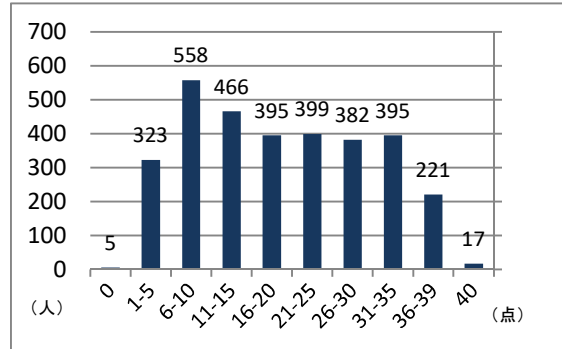
社会

平均点 20.4点 受検者数 3,169人



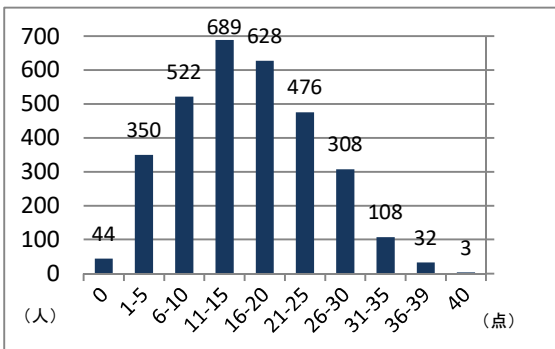
英語

平均点 19.2点 受検者数 3,161人



数学

平均点 15.7点 受検者数 3,160人



IV 結果の概要

1 抽出調査について

26中学校の各学級8人(男子4名、女子4名)をそれぞれ出席番号の早い順に1番から4番まで抽出生徒の記録としてデータを取る。欠席の場合は、出席番号を繰り上げて、各学級から8人の抽出を行うものとした。

2 抽出生徒数

学校数	学級数	抽出生徒数
26校	100学級	790人

(附属中含む)

V 各教科の概要

1 教科の考察

(1) 教科全体から見た結果

「得点分布表」「観点別解答率表」等から読み取れる教科全体の概要について、その特徴を表記する。

(2) 正答率の高い問題について

「設問別正答率表・グラフ」から読み取れる、正答率の高い問題について、考察を行う。

(3) 読解力と正答率の関連について

「設問別正答率表・グラフ」から読み取れる、正答率と読解力との関連について、実際の問題の一部を提示しながら考察を行う。

2 今後の授業に向けて

1の(3)で考察した読解力の視点も含め、今後の指導の工夫について表記する。

VI 読解力の視点からの考察

1 読解力

中央教育審議会答申において、PISA2015の結果から、子どもにとって言葉を取り巻く環境が変化することで読解力に関して改善すべき課題が明らかになったと示されている。なお、「PISA型読解力」とは、一般的な文字や文章といった「連続型テキスト」の理解だけでなく、グラフや図表、地図など様々な資料（「非連続型テキスト」）を理解し、利用し、熟考する力であるとされている。

2 読解力の視点からみえる課題

数学科において、規則性を見だし、文字式を利用して考察する設問（通し番号22）の正答率が32.0%、理科において、2つの天気図の違いを読み取り、気象の特徴を説明する設問（通し番号30）の正答率が20.8%であった。今年度の全国学力学習状況調査の中3理科においても、グラフから読み取った複数の観測データを天気図に関連づけて考察する問題の正答率が低かった。文章や表、グラフ等の資料を読み取り、分析して解釈することに課題がある。

社会科においては、2つのグラフと資料を参考にして意見文の空欄を補充する設問（通し番号34）で、正答率が49.2%であった。また、国語科の作文では、ことわざを引用し、自分の体験や見聞を中心に意見や感想を書く設問において「係り受けや書き言葉に注意し、適切な表現で文章を書く」（通し番号35）の正答率は53.3%であった。様々な情報を含む資料から目的に合った情報を選択し、読み取った情報を関連づけながら課題について考察することや、必要とされる内容や自分の考えについて適切な表現で書くことに課題がみられる。

3 読解力の向上に向けた今後の指導

○ 資料を読み、情報を収集する

文章だけでなく、表やグラフを含めた資料を扱う際、何のためにその資料を読むのか、読むことによって何を目指すのかといった明確な目的を生徒自身が理解できるようにしたい。そのために、個々の課題や目的に応じて「どこに注目すればよいか」「キーワードは何か」という視点をペアやグループで検討する場を設定したい。視点をもつことで、資料に含まれる多くの情報の中から必要な情報を精査して考えを形成することにつながる。また、生徒が社会問題や自然現象に興味や疑問を抱いた際、その解決に必要な情報を自分で収集し、獲得した知識を用いて資料を読み取る活動を積極的に取り入れたい。このような学習活動を可能にすることで、主体的な学びを促すことにつながる。

○ 情報を基に考察し、考えを表現する

収集した情報を利用して自分の考えを表現したり、自分の考えたことや感じたことを簡潔に書いたりできるようにしたい。そのために、資料を読む過程においては、キーワードや表を使って情報を整理することで、複数の資料の共通点や相違点、関連性が明らかになる。また、自分の考えを伝える文章を書き、互いに読み合うなどの学習活動を取り入れることで、適切な表現で文章を書く力を高めていきたい。その際、一人1台端末を活用して共有することで、生徒が多くの文章にふれることが可能となり、自分の表現を見直すことにもつながる。

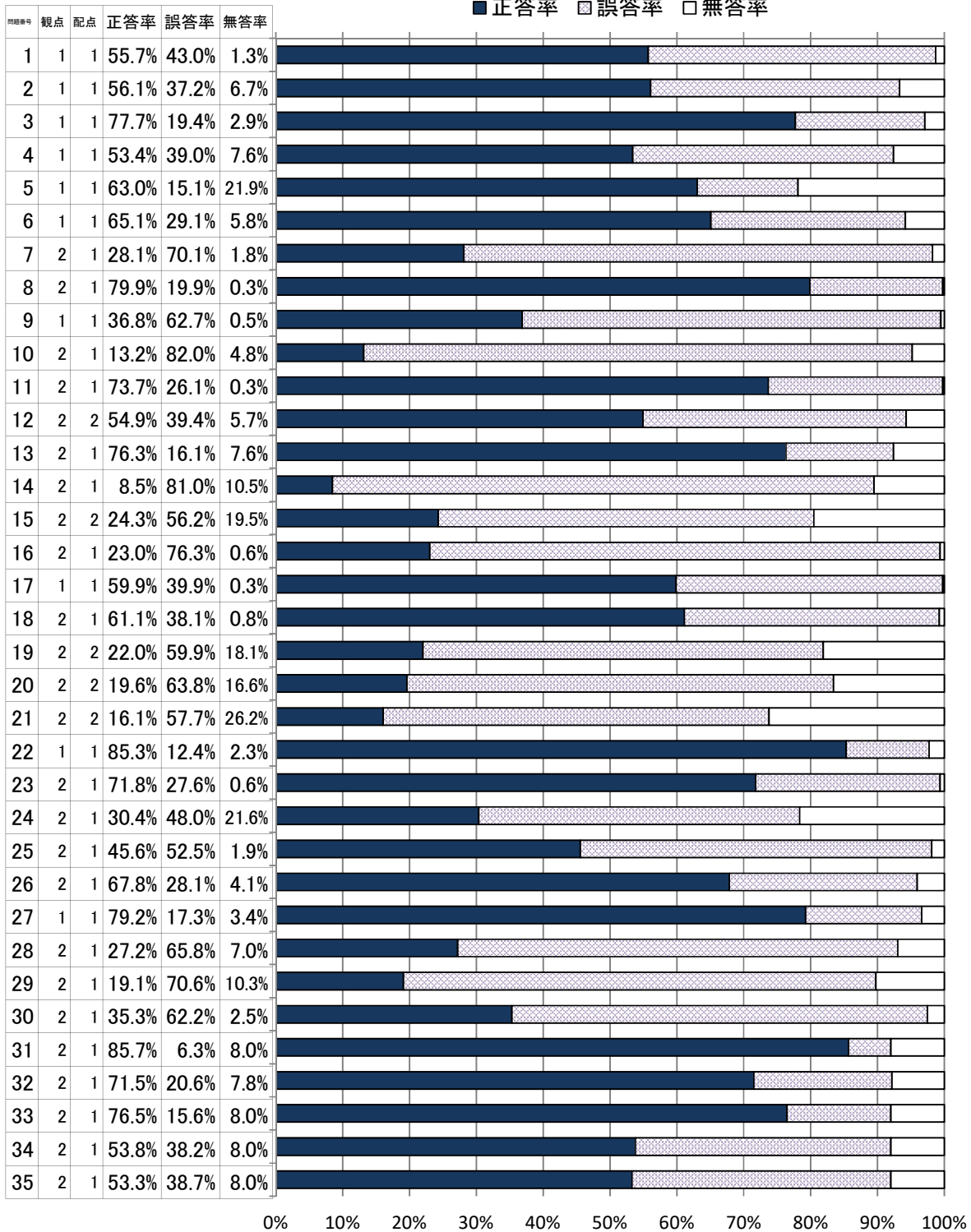
VII 中1学力調査との比較からの成果と課題

入学時の中1学力調査の結果と比べ、例年同様、全体的に正答率は低い。総得点の平均正答率は中1で65.3%（感染症拡大防止のための臨時休業期間後の実施のため参考値）、中3で46.6%であった。その中で、社会科の「思考・判断・表現」の観点において、無答率が5.8%から4.8%に、国語科の作文の設問において、無答率が8.7%から8%にわずかに向上しており、思考し表現する力はわずかながら高まってきていると考えられる。ひき続き、小学校段階から学習の振り返りを継続して書いたり表現したりするなど、言語活動を取り入れながら定着を図っていきたい。

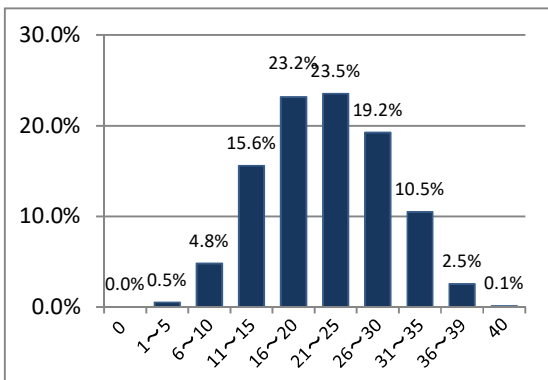
Ⅷ 抽出生徒から分析する各教科の概要

国語 抽出生徒数 790人 抽出平均 19.1点

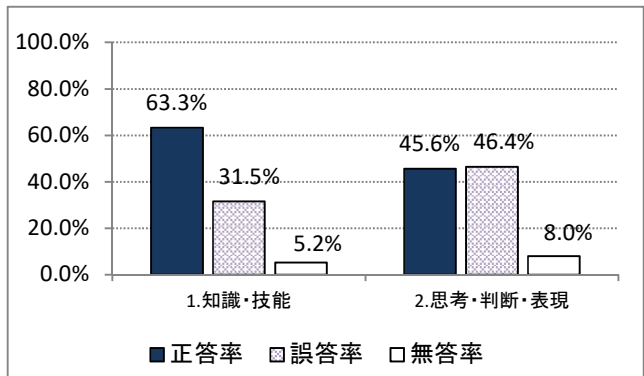
【設問別正答率表・グラフ】



【得点分布グラフ】



【観点別の解答率グラフ】



1 国語科の考察

(1) 教科全体から見た結果

抽出平均点は19.1点であり、昨年度(22.5点)から3.4点低くなっている。観点別の正答率は「知識・技能(63.3%)」より「思考・判断・表現(45.6%)」が低く、文章の内容を読み取って書く設問の無答率が高い。内容別に正答率を見ると、漢字の読み書き(61.8%)、説明的な文章の読解(41.9%)、文学的な文章の読解(45.8%)、古文の読解(45.7%)、作文(68.2%)となっており、説明的な文章の読解に課題が見られる。

(2) 正答率の高い設問について

「知識・技能」を問う設問では、「強いる」の読み方を答える設問の正答率が高い(通し番号3)。また、「をのむ」「をひそめる」のに共通する漢字を答える設問の正答率も高い(通し番号22)。古文に関する設問では、「やはら」の現代仮名遣いで読み方を答える設問の正答率が高い(通し番号27)。一方で、その他の漢字の読み書きに関する設問では、正答率は50~60%台であり、言葉に関する知識が十分に定着しているとはいえない。

「思考・判断・表現」を問う設問では、説明的な文章において、本文中の空欄に当てはまる接続詞を選ぶ設問の正答率が高い(通し番号8)。また、作文では、指定字数内で二段落構成にまとめて書くことができている生徒の割合が85.7%と、昨年度(81.4%)に引き続き高い(通し番号31)。無答率が8.0%(昨年度10.3%)と改善していることから、各校で作文指導が継続的に行われており、一定の効果を上げていることが分かる。

(3) 読解力と正答率の関連について

説明的な文章の読解では、本文の内容を指定字数内で記述する設問の正答率が24.3%と低い(通し番号15)。この設問は無答率が19.5%と高いが、先に述べた作文の無答率に比べて10%以上高いことから、書く力ではなく、読み取る力に課題があることがうかがえる。本文では共通点として説明されていないが、2つの事象の特徴が書いてある部分を把握し、共通する内容についてまとめる力が問われる設問である。

古文では、登場人物の言動の理由を答える設問の正答率が19.1%と低い(通し番号29)。文章の大意を把握し、端的に説明する力に課題が見られる。

(通し番号15)

「日本の箸」と「ふろしき」の共通点とは、どのような点ですか。「単純」という語を用いて、次の書き出しに合うように四十字以内で答えなさい。

*「日本の箸」と「ふろしき」は、()

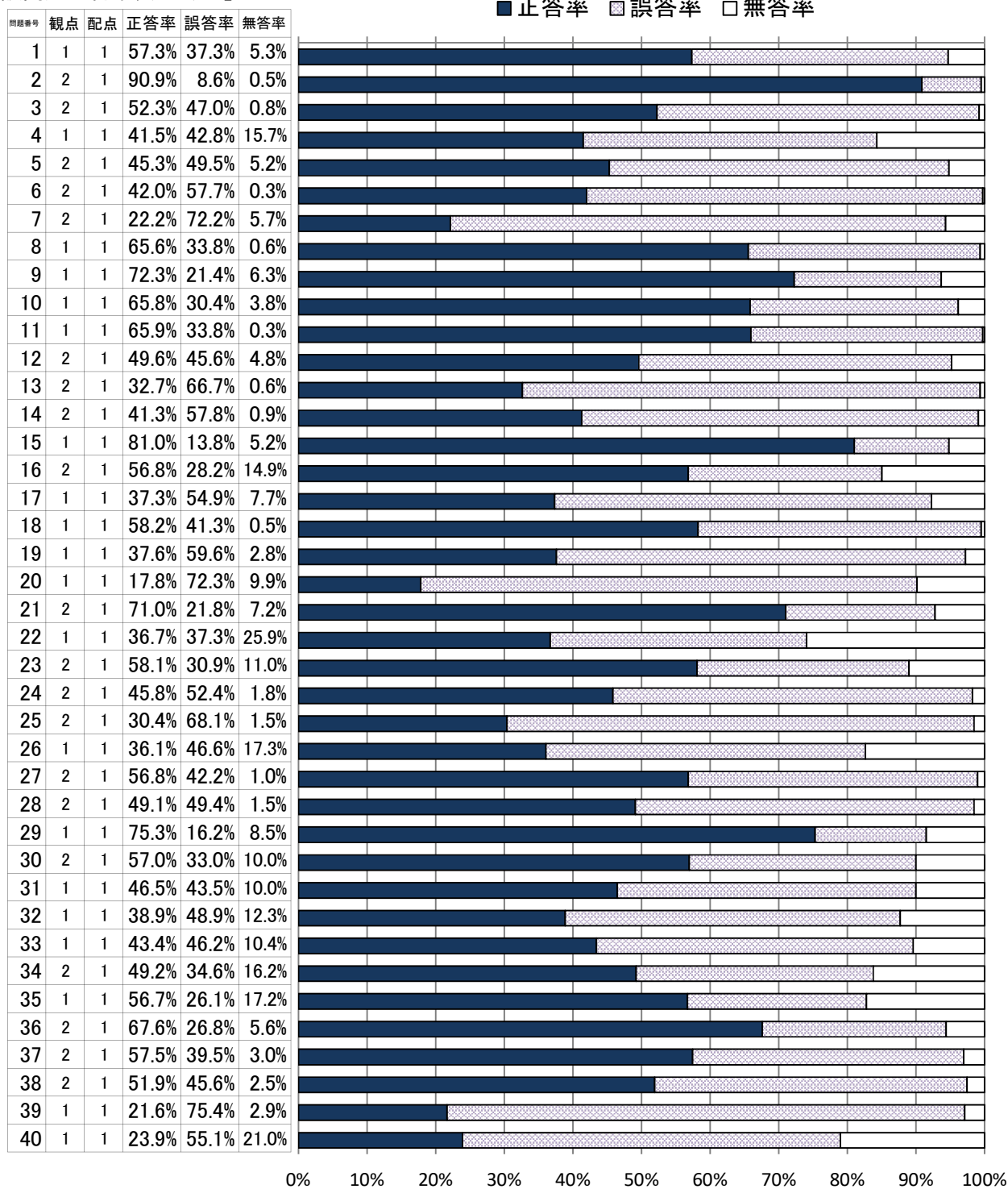
(通し番号29)

①泣きける とありますが、この児はなぜ泣いていたのですか。現代語で答えなさい。

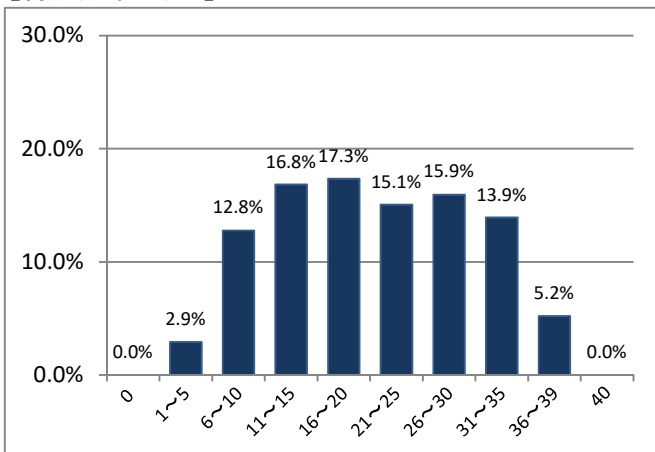
2 今後の授業に向けて

- (1) 読解力を養い、同時に書く力を養うための手立てとして、説明的な文章の読解においては、その構成を把握し、主張と事象の関係性を把握した上で、複数の事象の共通点や相違点を説明する活動を重点的に行うことが効果的である。その際、一人1台端末の同時編集機能を活用し、互いの意見を読み合い、従来の対面での学び合いへとつなぐことで、友達の説明の仕方を参考にしたり、より深く考えたりするなどの効果が期待できる。
- (2) 古文の大意を捉える力を養うには、教科書に掲載されている文章の読解においては、古文や漢文の音読を通して、古典特有のリズムに慣れ親しむとともに、現代語訳等を参考に、古典に表れたものの見方や考え方について現代と比較するなど、内容を理解できるようにすることが大切である。
- (3) 漢字や慣用句等の知識を定着させるための反復練習を継続的に行うとともに、語彙を豊かにするための手立てとして、教科書掲載の文章に関連する書籍を紹介するなど、読書活動の推進にも力を注ぎたい。

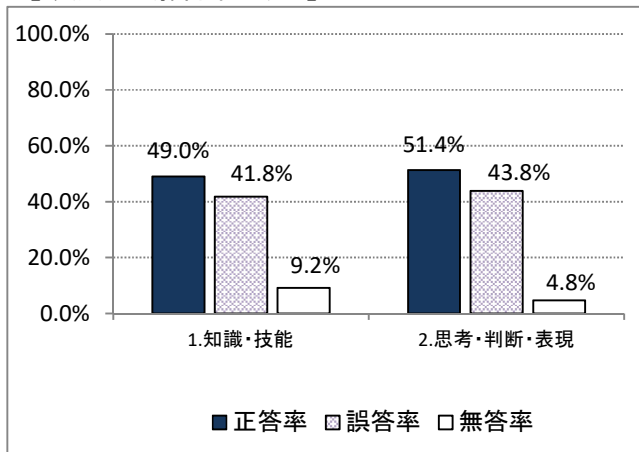
【設問別正答率表・グラフ】



【得点分布グラフ】



【観点別の解答率グラフ】



1 社会科の考察

(1) 教科全体から見た結果

抽出平均点は 20.1 点で、観点別の正答率は、「知識・技能」が 49.0%、「思考・判断・表現」が 51.4%である。歴史的分野において正答率が 40%を下回る問題が 6 問（14 問中）あり、内 5 問が基本的用語・事項を答える問題であった。また、無答率が 10%以上の問題は 12 問で、昨年度の 5 問より増加しており、特に公民的分野における問題での無答が目立つ。

(2) 正答率の高い問題について

「知識・技能」では、基本的用語・事項を答える問題の正答率が高い。（通し番号 9、15、29）

「思考・判断・表現」では、世界地図上に示された太平洋の位置を、地球儀上の位置と合致させる問題、風刺画の変化から社会情勢の変化を読み取って答える問題の正答率が高い。（通し番号 2、21）

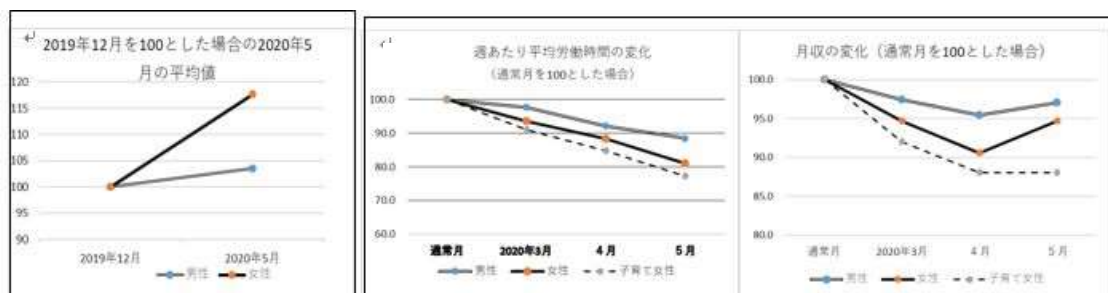
(3) 読解力と正答率との関連について

家事・育児時間と労働時間・月収の変化を表した 2 つのグラフを読み取り、女性が受けた影響を答える問題の正答率は 57.0%であった。グラフを読み取り、感染症の拡大によって女性の家事・育児時間が増加したことが、女性の労働時間・月収の減少につながったことと関連づけることが必要であった。グラフや資料が示す意図を読み取り関連づけて考察し、キーワードを用いて表現する力に課題がある。（通し番号 30）

（通し番号 30）

花子さんは次のような資料 1・2 を見つけた。感染拡大で女性はどうの影響を受けたか「負担」という語句を使って答えなさい。

資料 1 家事・育児時間の変化 資料 2 2020年の全国一斉休校中の労働時間と月収の変化



（『令和3年度厚生労働白書』より作成） ※2020年3～5月は全国で一斉休校が行われた期間（『令和3年度厚生労働白書』より作成）

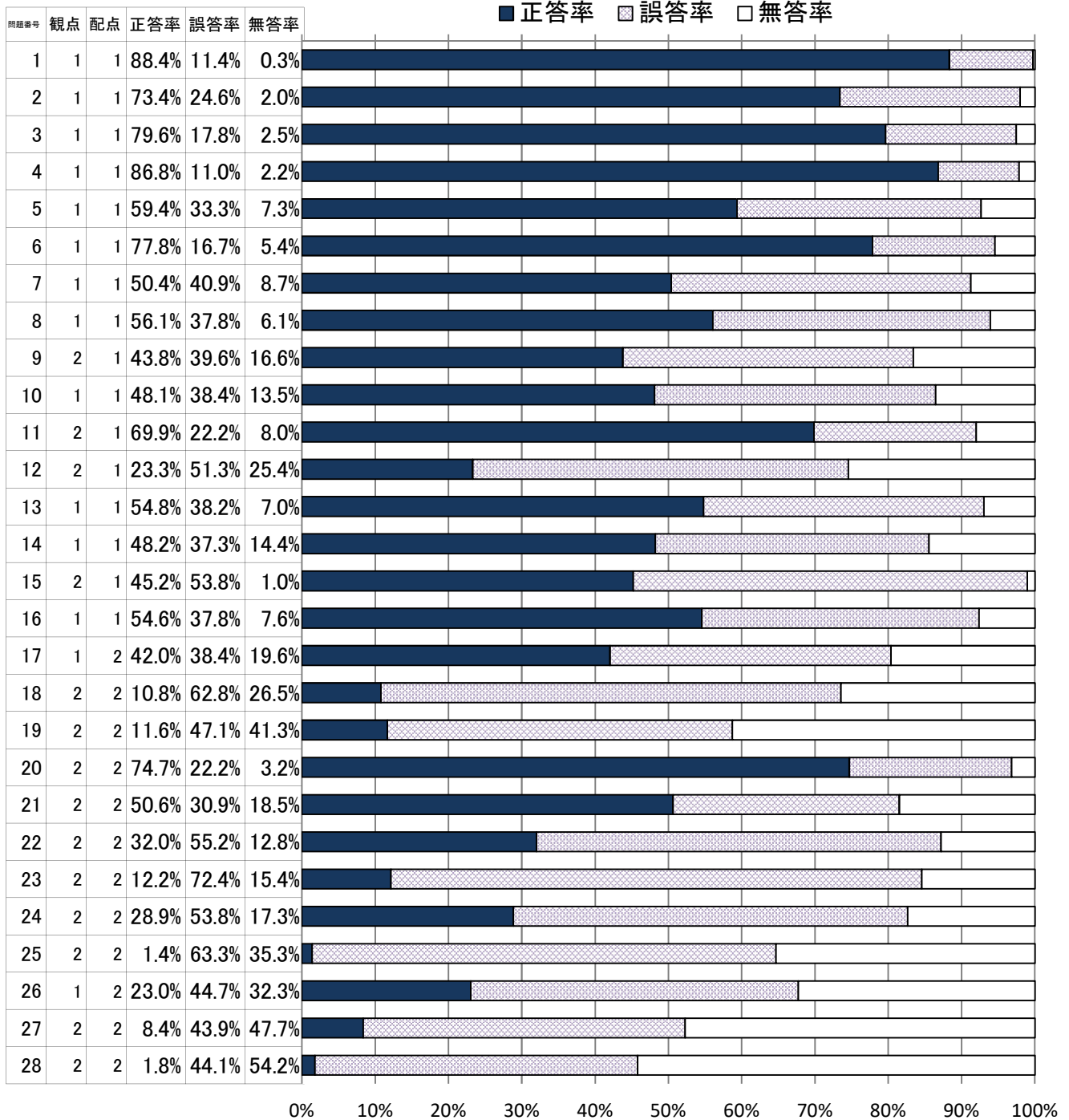
2 今後の授業に向けて

(1) 説明を記述する問題は、全体的に正答率が 50%前後と低い傾向が見られる。グラフや表等の資料を根拠として説明する力を育成するために、量、変化、割合等を視点として資料を読み取り、キーワードを使って社会的事象との関連を位置づけながら短文で表したり、文の書き出しを指定して説明したりする機会を今後も継続的に設けたい。さらに、授業でのまとめや振り返りをノートや端末上に記し、単元の最後にそれらを読み返して、学習内容を確認する場面を計画的に取り入れたい。

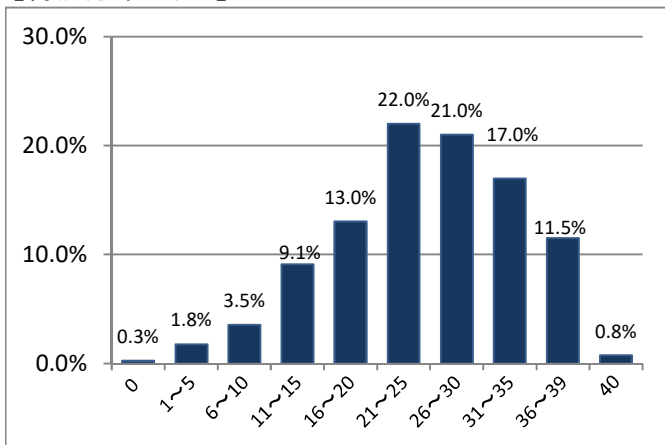
(2) 班田収授法、株仲間、殖産興業等、歴史分野における基本的用語・事項を答える問題での正答率が低い。学習内容の深い理解と、知識の定着を図るため、土地制度・租税史、経済史等のテーマに応じた問題解決的な学習を行いたい。具体的には、背景、原因、結果、影響等の視点に着目して、古代から近現代までの複数の社会的事象間のつながりを考え、現在の制度が確立した理由を考察するなどの学習活動が考えられる。

(3) 生徒が主体的に学ぶ授業を行うために、資料の見せ方や提示の順序等を工夫するとともに、「既習の内容や経験と関連づけて考える課題」「答えが複数ある課題」「自分が導き出した考えと友達の考えを比べることで深まりが増す課題」等、生徒がじっくりと考えたくなるような学習課題の設定を心がけたい。

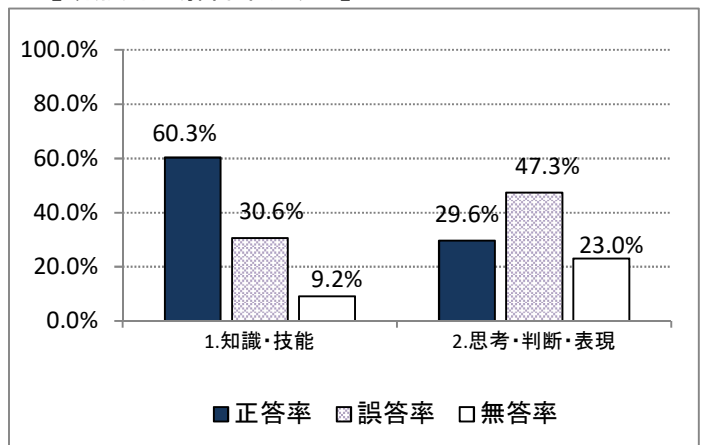
【設問別正答率表・グラフ】



【得点分布グラフ】



【観点別の解答率グラフ】



1 数学科の考察

(1) 教科全体から見た結果

抽出平均点は15.8点であった。観点別にみると、「知識・技能」の正答率が60.3%であったのに対して、「思考・判断・表現」の正答率が29.6%と低い。また、無答率が10%以上の問題は15問あり、領域別に比較すると「図形」領域は8問すべてが該当している。

(2) 正答率の高い問題について

「数と式」領域では、正の数と負の数の四則計算、一次式の計算をする問題、連立方程式を解く問題、数の平方根を含む式の計算の正答率が75%を越えている（通し番号1、3、4、6）。

また、「思考・判断・表現」の観点で正答率が高かったのは、数量の関数をとらえて、二次方程式を活用する問題（通し番号11）の正答率が69.9%であった。

(3) 読解力と正答率の関連について

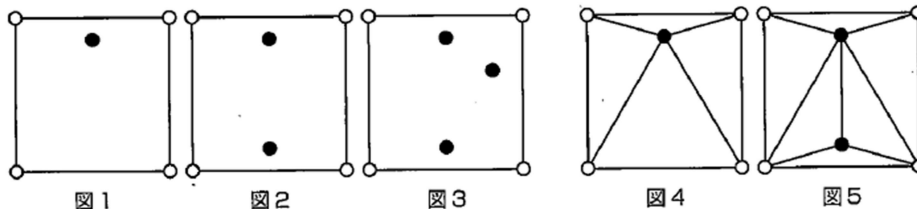
規則性を見だし、●で表された点が10個である場合の線分の本数を求める問題の正答率が32.0%と低かった（通し番号22）一方で、無答率は12.8%であり、正答率が40%を下回った10問の中では最も低い無答率であった。正答率が低いにも関わらず、比較的無答率が低いという結果から、生徒は2数の関係について文章で示されている内容を表や文字式などに表して考えるのではなく、実際に図の中に三角形をかき、線分の本数を数えて求めようとしたものの、正確に作図できない等の理由により正答とはならなかったと推察される。

(通し番号21、22)

- (5) 図1～図3のように、○で表された4点を頂点とする正方形があり、正方形の内部には●で表されたいくつもの点がある。ただし、○や●で表された点はどの3点も一直線上にないものとする。このとき、次の作業Aにより、正方形をいくつかの三角形に分割する。

【作業A】 ○や●で表された点を次々と異なる線分で結ぶ。線分は他の線分と交わらないようにひく。線分をひくことができなくなったら作業をやめる。

例えば、図1の正方形は、図4のように線分をひくと4個の三角形に分割できる。図2の正方形は、図5のように線分をひくと6個の三角形に分割できる。



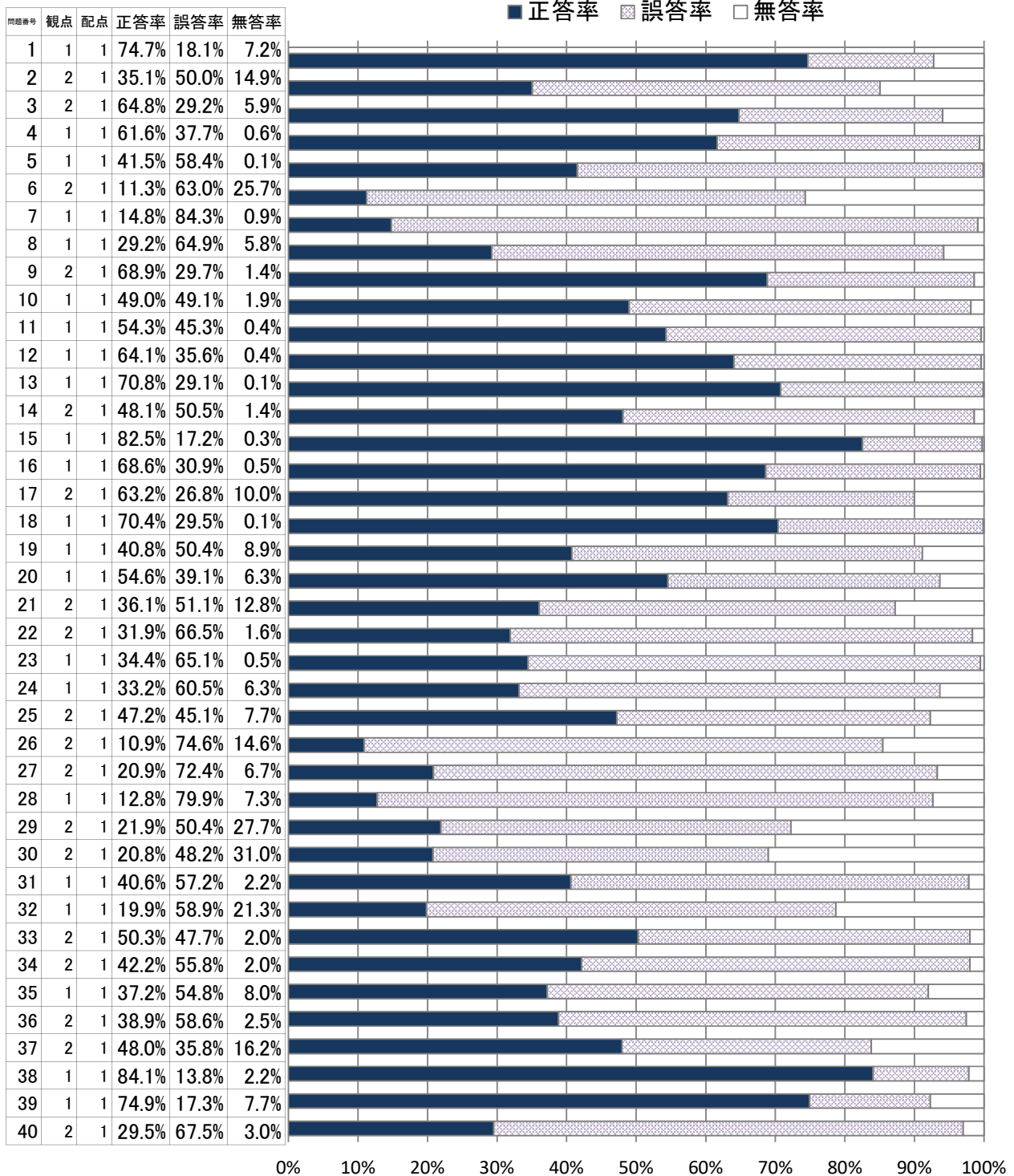
次の問いに答えなさい。

- (3) ●で表された点が10個あるとき、作業Aでひく線分の本数を求めなさい。

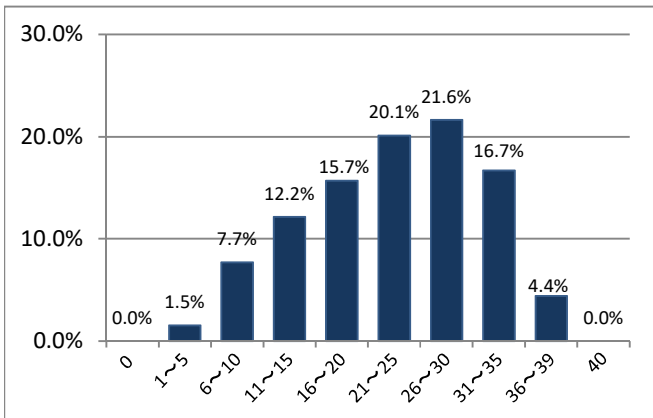
2 今後の授業に向けて

- (1) 「思考力・判断力・表現力」を養うためには、日ごろの授業から答えを問うだけではなく、その答えにたどり着くまでの過程を大切にするような学習を心がけたい。その際、生徒が自分の考えを友達に説明したり、友達の説明を聞いたりする中で、考え方の共通点や差異点等を比較、分類できるような視点を提示し、考えを交流するようにしたい。
- (2) 文章で示されている内容を表や式などに表し、その関連について理解する力を養うためには、文章にかかれていることを表に整理したり、グラフから読み取れることを言葉で発表したりするなど、多様な表現方法に変換する活動を取り入れることが有用である。それらの取り組みを行う中で、それぞれの表現のよさや適性について理解が深まり、目的に応じて表現方法を取捨選択し、見いだした事柄を数学的に表現する力が身についていく。

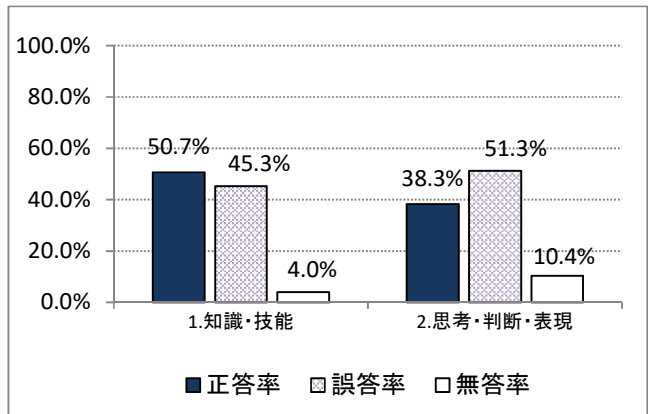
【設問別正答率表・グラフ】



【得点分布グラフ】



【観点別の解答率グラフ】



1 理科の考察

(1) 教科全体から見た結果

抽出平均点は 18.0 点であり、昨年度の 22.5 点を下回った。観点別でみると、「知識・技能」の正答率が 50.7%、「思考・判断・表現」は 38.3%であった。無答率が 10%以上の設問は 9 問（設問数全体の 22.5%）であり、昨年度より多い。

(2) 正答率の高い設問について

「運動とエネルギー」で電車の急発進・急停車という身近な物理現象について体験を基に考える問題の正答率が 84.1%と最も高かった（通し番号 38）。

さらに、「生物の体のつくりと働き」では、様々な体の反応について理解し、反射の実例を適切に選ぶ設問の正答率が 70%以上であり、体験と科学的事象を結びつけられる知識・技能が身につけているといえる（通し番号 18）。

(3) 読解力と正答率との関連について

「気象とその変化」において、日本の天気に影響を与える気団を理解し、梅雨の特徴について説明する設問の正答率が 20.8%と低い（通し番号 30）。現象と天気図とを関連付けながら読み取り、気象要素に関する知識を活用しながら、気象の変化について考察する力に課題がある。

(通し番号 30)

[8]

- (3) 梅雨明けの時期が近づくころには、下線部②のようになる。図 1 と図 2 の天気図のちがいを参考にしながら、梅雨前線が北へ移動する理由を説明しなさい。

花子：ありがとう。ところで、まだ6月だというのに、北陸地方の梅雨明けの発表があったらしいね。観測史上最も早い梅雨明けなんだって。正式には9月に決まるらしいけど……。

太郎：ということは、②梅雨前線が北に移動して、もう無くなったということ？

花子：これは、梅雨まっただ中の天気図（図 1）と、梅雨明け発表日の天気図（図 2）だよ。確かに、図 2 には梅雨前線が無いよね。

太郎：本当だ。早くも、高温多湿で晴れる日が多い夏がやってくるのか。

図 1

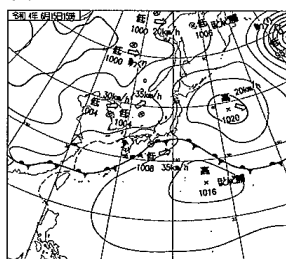
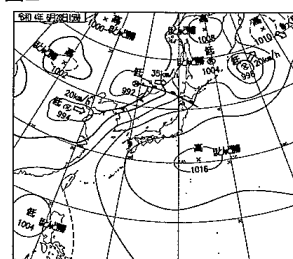


図 2

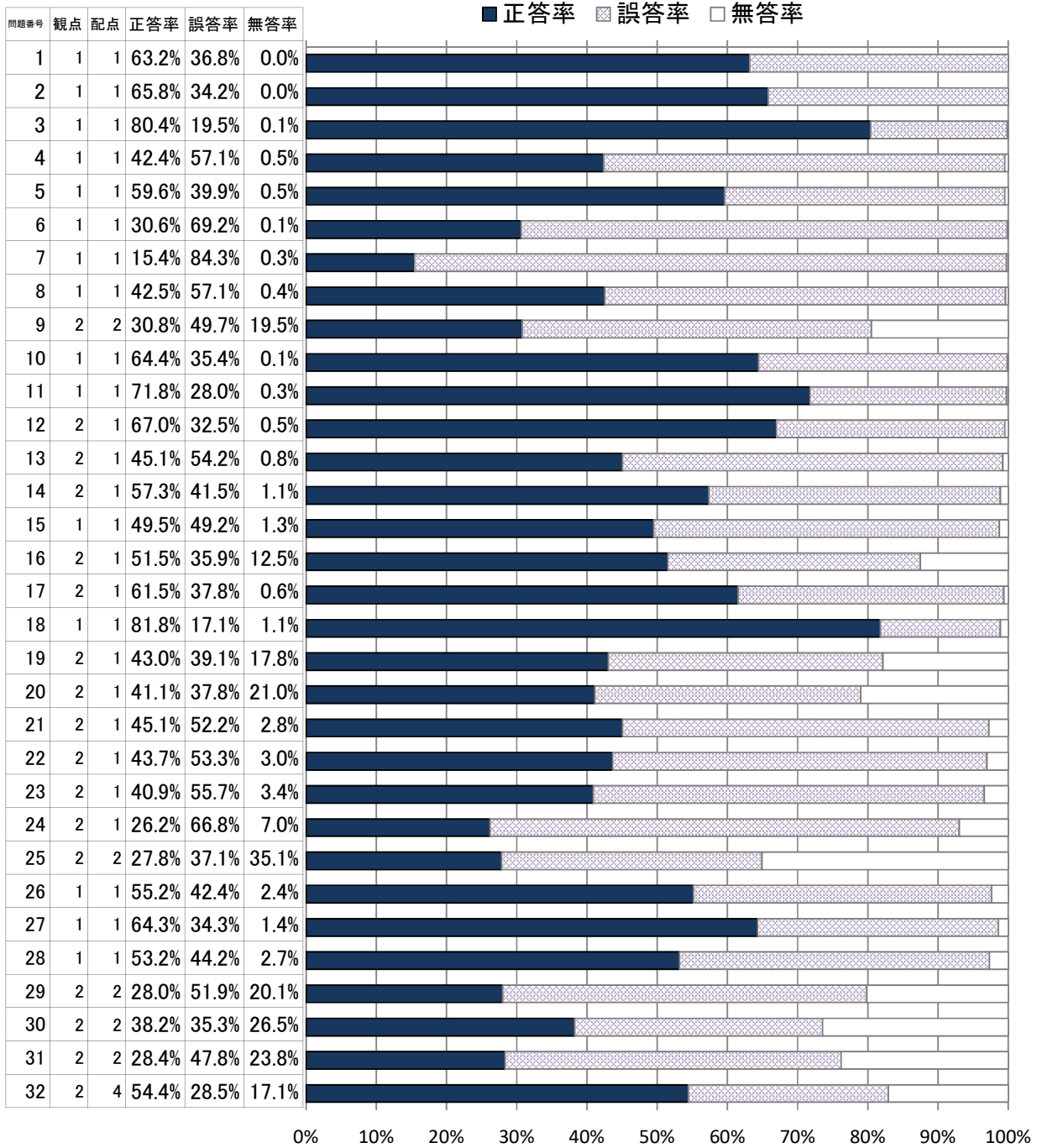


(気象庁ホームページ)

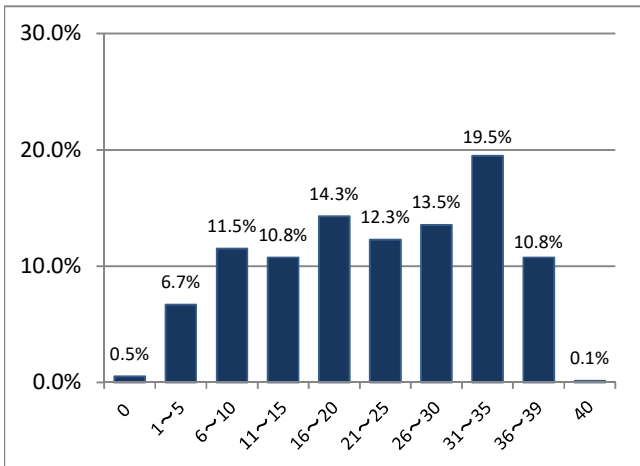
2 今後の授業に向けて

- (1) 身近な現象を科学的に探究する際には、生徒の気づきや疑問を基に、切実感のある課題を設定することが重要である。そして、根拠のある仮説を立てるために既習事項を活用したり適切な情報を取捨選択したりするなど、検証までの見通しをもって観察・実験を繰り返し行うことが有効である。
- (2) 「知識・技能」を高める手立てとして、観察・実験を安全に正しく実施する技能に加え、得られた実験結果が妥当であるか、正確性が高められているかという視点を大切にし、生徒が誤った実験結果を基にした場合は、実験方法や検証過程を再検討する学習場面が必要である。また、観察・実験から得られた知識を基に「身近な現象では何に当てはまるか」など、日常生活との関連性に目を向けることで知識の定着が図られることも意識して指導にあたりたい。
- (3) 「思考力・判断力・表現力」を高める手立てとして、実験や観察を行う際には、データを図、表、グラフ等、適切な形式でまとめたり、規則性を見いだす際には複数の結果や科学的事象を関連付けて分析したりするなど、生徒自身の言葉で解釈・表現する学習活動の充実が考えられる。

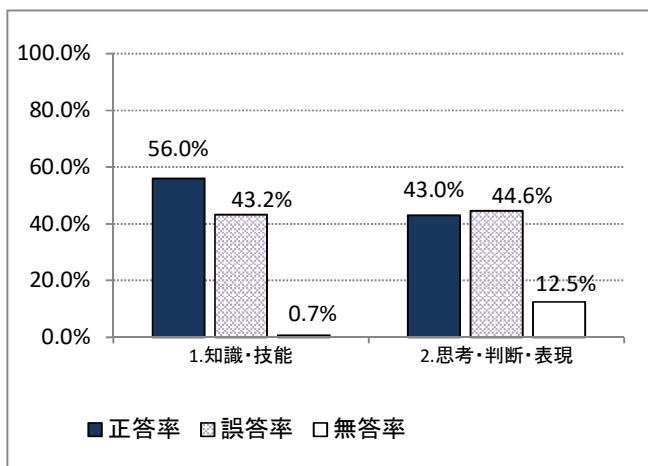
【設問別正答率表・グラフ】



【得点分布グラフ】



【観点別の解答率グラフ】



1 英語科の考察

(1) 教科全体から見た結果

抽出平均点は18.8点である。観点別でみると、「知識・技能」の正答率が56.0%に対し、「思考・判断・表現」の正答率が43.0%と13%低い。また、「知識・技能」の無答率は0.7%に対し、「思考・判断・表現」の無答率は12.5%と11.8%高い。無答率10%以上の問題は9問であり、記述式の問題での無答が目立つ。

(2) 正答率の高い問題について

「知識・技能」(全15問)に関する問題では、英文を聞いて、その内容の正誤について答える問題や文脈に合う英文を選ぶ問題の正答率が高い(通し番号2、3、10、11、18)。「思考・判断・表現」(全17問)に関する問題では、長文の内容に合うように表に適する語を選ぶ問題や、対話文の文脈に合う語を選ぶ問題の正答率が高い(通し番号12、17)。

(3) 読解力と正答率との関連について

健康的な生活を送るための考えを問う質問に対して、英文で自分の意見を書く問題では、正答率が27.8%とかなり低く、無答率が35.1%とかなり高い。このような問題では、英文を読み取って内容を把握するための語彙力や文構造を理解する力、テーマに対して自分の考えをもち、これまでに学んだ言語材料の中から適切な表現を選んで書く力が必要であり、これらに課題があると考えられる(通し番号25)。

(通し番号25)

(4) ALTのホワイト先生(Ms.White)に、次のような質問をされました。あなたならどのように答えますか。

5語以上の英文で書きなさい。

Ms.White: Ryota made a good report. We learned that sleep is important.

Do you have any other ideas for a healthy life?

あなた: Yes. []

Ms.White: That's a good idea!

2 今後の授業に向けて

- (1) 外国語でのコミュニケーションにおいて活用できる「知識及び技能」を身につけるために、実際の生活場面において必要なコミュニケーションの技能を習得できるように、相手意識や目的意識が明確になるような課題を設定する。目的や場面、状況に応じて適切な表現を選択したり、情報を整理して意見や思いなどを相手に伝えたりする言語活動を繰り返し行うことで、表現内容の適切さや英語使用の正確さを高めていく。
- (2) 「思考力・判断力・表現力等」を育成するために、既得の知識や経験と新たに得られた知識を活用する言語活動を設定することで、日常的な話題や社会的な話題について、必要な情報を読み取り、自分の考え等を表現したり伝え合ったりする力を養う。
- (3) 「主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度」を養うために、生徒が興味をもって取り組める言語活動を易しいものから段階的に取り入れながら、自分の思いや考えを話したり書いたりして伝え合う表現活動の機会を十分に確保する。その際、学んだことを再度活用する場面を設定し、生徒が自身の学びや変容を自覚できるように支援することで、自信をもって積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。